

宮崎県小林市須木中学校の CLIL



2026年6月18日、宮崎県小林市須木中学校を訪ねました。英語の先生は、中田亜紀先生です。JAT のプログラムを受講しているので、今回訪問して授業を見学させていただきました。小規模の中学校です。見学したクラスは中学校3年生9名です。各学年1クラスで、先生一人で全生徒の英語を教えています。

聞くところによると、宮崎県は、都市部以外は過疎化が進み、学校の統廃合もますます進んでいくそうです。日本全体が高齢化・少子化なので、この傾向はあちらこちらで当分続くのでしょうか。しかし、須木中学校の英語の授業では、CLIL の要素も取り入れて、生徒は、教科書の内容を理解し、考え、互いにコミュニケーションしながら、互いの文化を尊重しながら、生き生きと活発に学んでいました。教科書は『Sunshine English Course 3』（開隆堂）で、単元は「Hot Sport Today」です。指導案には、CLIL ということは一言も書いていませんが、私には CLIL の要素が詰まったチャレンジングな授業に見えました。

授業は、small talk に始まり、教科書の3つのパートをグループで分担し、内容を英語で自分の言葉でまとめ、伝える、という retelling の活動です。ごくふつうの中学校のごくふつうの中学生

が、とても質のいい学びを実践している姿に、日本の中学校における CLIL の一つの実践を見て、いい勉強になりました。このような公立学校における CLIL 実践を応援したいと思っています。ありがとうございます。

授業観察の考え方

授業を観察する際には、視点がどこにあるかによって見え方が違ってきます。教師、教材、生徒、活動、全体、部分など、さらにはそれぞれの相互作用などにより、授業はさまざまに見えます。私は、CLIL という視点から授業を見ました。その志向性(intentionality)が働いているということを考慮してください。

授業観察については、自分自身の授業も含めて、かなりの数の異なる授業を観察してきたと思います。ふつうの人よりは多いと思います。が、どの授業もいろいろな視点で見ると興味深いものです。なぜかと言えば、その場限りの現象なので、どのように私が考えたとしても、自分だったらこうするなどと思いますが、それが適切かどうかは、教師や学んでいる生徒が判断することで、教師のアプローチがそれほどよくなくても、生徒はけっこう学んでいると考えるからです。私自身の教師としてのリフレキシビティ(reflexivity)には大いに役立ちます。

いわゆる授業観察(classroom observation)は、教師の指導を観察することが目的となっています。が、私は、教師の活動にはあまり興味がなく、生徒が何をしているのかに関心があります。生徒が教師とどうやりとりをして、生徒が教師のどこに注目し、何を聞いているか、見ているかなどです。生徒を見るということは、学習を見るということです。それも授業全体を見るよりも、生徒個人を可能な限り見ます。要するに、学習の現象(phenomenology)を考えたいのです。

私は、いつも、まず教室全体の雰囲気を見るようにします。非科学的かもしれませんが、教室の壁、黒板、プロジェクター、掲示物、机、教具、教室の後ろや横にある個人の持ち物を置いておく場所な

どをざっと見ます。理由は、教室のあちらこちらに日々の学習の跡があるからです。一度の授業を見て、あれこれ議論しても形式的になってしまうからです。ビデオではなく、実際に授業を見る場合は、好きなところを好きに見られるので、その利点を生かします。

授業観察の感想



今回は、いわゆる研究授業(research lesson)という形式で、教室の後ろの方に参観者がいるという設定です。指導案も配布されました。しかし、見せようという態度などがなく、とても自然な学習活動で、ふだんの様子が想像できました。一言で言うと、英語を学ぶ、使う、コミュニケーションをする、単に英語を理解するだけではなく、自分たちの考えを英語で発信する、という活動が、ごく自然にアレンジされていた印象を持ちました。

教師と生徒が和やかに安心して学んでいる。生徒は、CLIL
ということ意識せず、統合した学びをしている。英語も日

本語も自然に使われていて、言語理解と使用を柔軟に考えている。

これがこの授業に対する私の総合的な評価です。中学校の英語の授業の中に、CLIL の理念が無理なく生かされていた授業だと、私は思いました。

教室環境と生徒

生徒の様子、先生の立ち位置などについて観察します。9人しかない教室はレアです。40人近くいる教室とは異なります。どの程度が最適かはむずかしく、教師によって好き嫌いがあります。20人程度、30人程度の生徒がいる場合とはやはり違います。私は、1人から100人くらいの生徒の教室の経験がありますが、15人くらいが一番好きです。

教室も、サイズによって、机や椅子、教具、壁や窓など、学校の周囲の環境などなど、無視することはできません。須木中学の環境は落ち着きます。学校に着いたときからそう思いました。授業中は雷が鳴り、土砂降りが一時的にありましたが、授業にはまったく影響しませんでした。これはすごいことです。生徒はまったく気にしません。

授業中は、3人ずつのグループで前を向いて生徒は座っています。が、3人が、それぞれの学習とグループとしての活動を、実によくやっていました。かなりの学習量だと思います。グループだと机を寄せてお互いの顔を見て活動する方が効果的と思いましたが、意外とうまくコミュニケーションしていたのはびっくりしました。学校全体の雰囲気がよく現れていたような気がします。みなさん仲良し(?)なのでしょう。

さらには、教室の黒板周辺には、視覚的に学習のポイントが提供されています。教師の学びに対する scaffolding がさりげなく準備されていました。中田先生は、忙しい中で、さまざまな工夫をして、生徒を第一に考え、どのような学びが最適かを常に考えているので

しょう。だからこそ、CLIL に興味を持つと考えました。その意欲がよく感じられました。

授業の流れ（ビデオは簡略版）

Warmup

中田先生は、アメリカプロバスケットボールチームの選手のユニフォームを着ています。授業内容とかかわる一つの readiness であり scaffolding と考えられます。このような教科書の題材と関連した準備は、生徒の学習への意欲につながり動機づけとなります。ちょっとした工夫ですが、アメリカの友人のエピソードを交えたりすることも、生徒には刺激です。生徒のやる気は授業開始で決まりました。

New York Knicks | 2026 NBA Champions

導入部分で Knicks というニューヨークのチームが優勝した話題から、生徒同士で英語と日本語による small talk が始まります。ふだんから routine としてやっている活動なのでしょう。生徒はコミュニケーションを楽しんでいました。このような生徒が楽しんでいる姿、積極的な態度はとても重要です。「生徒が英語でコミュニケーションをしないので困っています」という教師の声をよく聞きますが、まずは楽しく活動する雰囲気を作ることだと思います。この授業はそれがうまく機能していました。手前味噌ですが、その秘密は CLIL にあると言えます。

このように導入の段階で CLIL の要となる内容を扱うことは、小学校でも中学校でも高校でも大学でも、どの学校段階でも可能な展開です。人によっては、CLIL とは言わないかもしれませんが、英語の授業の中で扱うわけですから、私は、CLIL の重要な活動の一つと考えています。Routine として話題（内容）と small talk を毎回楽しむというように工夫することで、CLIL という統合学習が馴染んでくるのです。

別の言い方をすると、生徒は、話す話題があれば、話すのです。しかし、話すためには、そのための基礎的なコミュニケーションの練習を毎回する必要があります。中田先生の授業には、そのための scaffolding や translanguaging の基本的な理解ができていると、私は思います。このような Warmup 活動はどの先生も工夫すると思います。CLIL かどうかはあまり関係ありません。その日の授業の内容とあえて合わせる必要もないと思います。私自身の授業も、高校でも大学でもほぼ同じです。必ず何かの話題から始めていました。それが日本の英語授業の環境では、CLIL と言ってよいと、私は考えます。

Key learning points

この授業では、その活動につなげて、教科書の文法項目をさりげなく導入します。ここでは、動詞 call の文型で、You call *maguro* tuna in English.などを導入します。教科書で設定している語彙や発音や文法などの言語形式(language form)は、一つの目標となっています。中学校の英語授業のカリキュラムは学習指導要領により規定されているため、ある程度教科書の内容に沿って指導する必要があります。定期テストも、高校受験もあるので、ないがしろにはできません。CLIL、CLIL と勝手に、教師がすすめるわけには行かないので、いわゆる partial CLIL になるのは仕方ありません。

意味内容(meaning)や言語機能(language function)などについても、ていねいな指導が必要です。この授業の工夫は、教科書の3つの part を理解し、その背景についても、グループの中での学び合いをうまく利用していました。活動を見ているとよくわかります。「中学校はカリキュラムが厳しいので、CLIL は無理です」という声もよく聞きます。私自身もそう思います。

しかし、それは CLIL をどう考えているかによるのでしょう。中田先生のように考えれば、それほど無理ではないのではないかと思います。必要な言語形式、意味内容、言語機能は、CLIL の理念さえ理解できていれば、ある程度カバーできます。中学校の英語指導のヒントはこういうところにあると思います。

Activities (Jigsaw activities)

その後、グループ活動をします。Jigsaw 活動を応用して、教科書の part を英語でまとめる活動や、共有する活動や、発表する活動をして、「みんなが楽しめるスポーツについて考える」という学習目標に向けて活動します。この活動のポイントは、ただ教科書の言葉をなぞるのではなく、どのように自分たちの言葉で簡潔に適切にまとめるかを考え、どのように伝えるかを自分たちで工夫することが含まれていることです。

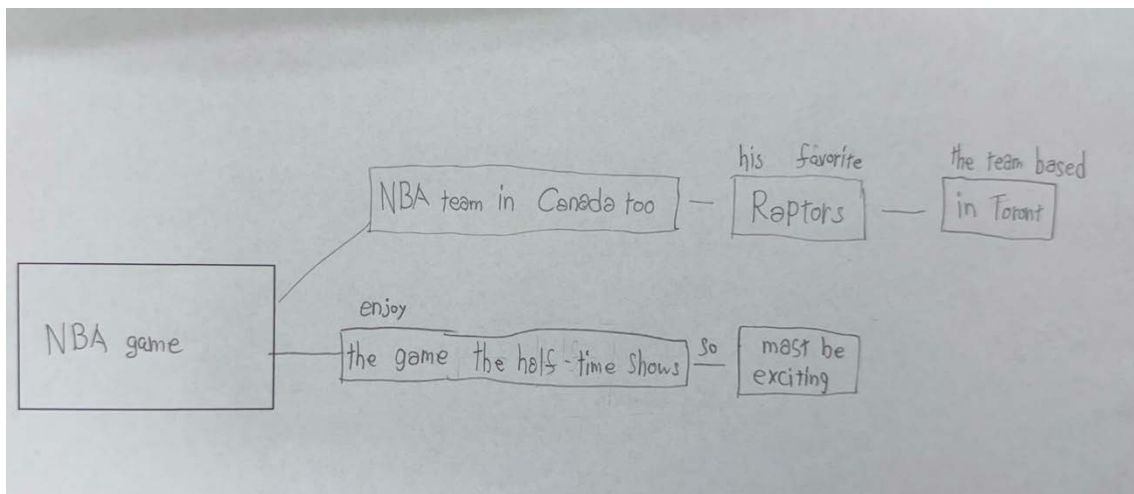
まとまったら、教師に伝えるためにそれを retell します。その際に、先生は質問もします。その質問に生徒はなんとか答えようとします。ここがもう一つのポイントです。自然な(spontaneous)会話の機会を作るのです。メモを読むだけの発表にはならないのです。授業時間を忘れて活動している生徒の様子から、「生きた経験(lived experience)」が、ここで培われていると考えます。

CLIL の授業にはそのような授業がよくあります。単に質問に答えるとか、タスクを実践するだけではなく、学習の中身があるから時間を忘れるのです。ただ、タスクをするだけ、質問に対して答えるだけ、などの活動では意味がありません。このような機会を演出することが、教師の役割でもあります。

Retelling は特殊な活動ではありません。日常ごくふつうに行われることです。教科書の執筆者である卯城祐司先生が詳細に説明しているとおりです。

Retelling のすすめ

CLIL では、この活動は、人に説明したり、自分の考えを伝えたり、何かを整理したりする際に、ごくふつうに行われることです。Retelling を何か特別な SLA の活動のように考え、方法論を述べるのは、私は違うと思います。それは研究者のすることで、教師はそこまで分析しなくても問題はないです。その活動を生徒は熱心にやっていました。その際に生徒が書いていたマップの例です。



このようなメモを作って思考し、整理して、retell をするわけです。これは、日本語でも意識せずに、けっこうやっていることです。さらには、英語でも presentation の際には、ほぼやっています。ただし、このような活動が中身の無い活動となってしまうとほぼ意味がないと思います。この授業では、生徒が熱心に「自分の言葉」で伝えるために「どうしたらいいんだろう」と考えている様子がありました。これは CLIL の活動につながります。その思考が一番の学習です。

さいごに、グループで考えた内容を、先生に retelling します。クラスサイズが大きくなるとむずかしいと思いますが、工夫すれば同様の活動はできると思いました。時間がなくなり、1グループしか先生に発表できませんでしたが、そんなことはどうでもいいのです。生徒にとっては学びの多い活動だったと思いました。

Reflection

公立中学校での CLIL は、事実として、日本ではなかなか広まりません。小学校でもそうかもしれませんが、中学校に較べると、それなりに普及してきたと思います。CLIL が広まらない要因は正確にはわかりませんが、学習指導要領ではないはずです。

その周辺の英語学習に対する伝統が、そうさせているのかもしれませんが。授業のパタンの伝統、「英語で授業をする」、教科書を終わらせる、言語形式の指導に偏る、定期テスト、横並びの学習進度、

受験対策、評価方法、教育委員会の指導、クラスサイズ、カリキュラム、教具、タブレットの利用、デジタル教科書・教材の利用など、さまざまな要因があるのかもしれませんが。

さらには、ひょっとすると、CLIL に対する誤解があります。「数学や理科を英語で教えるという授業が CLIL で、それ以外は CLIL ではない」というステレオタイプが定着しているような気がします。そのために、CLIL を実践することは負担となり、英語の教師や英語教育指導者は、CLIL は知っているけれど、あえて取り入れる必要はないと考えているような気がします。つまり、多忙です。

中田先生が作成した指導案には、CLIL に一言も触れていません。しかし、私が見学した英語授業は CLIL と言ってもまったく問題ないと思います。CLIL と言うか言わないかは、私は気にしませんが、立場上、CLIL を推進する NPO 法人を運営しているので、こだわります。もしかして、CLIL という言葉が多くの教師に嫌われているのであれば、それはそれでいいです。生徒のためにいい授業をしてください。ただし、CLIL の理念は、英語授業をちょっと変える、楽しくする要素があるとだけ言いたいのです。

授業を見ながら考えました。「CLIL を実践するとはどういうことか？」ということです。ヨーロッパの CLIL を真似する必要はないと思いますが、世界的に、バイリンガル教育が標準になりつつあります。CLIL とバイリンガル教育はほぼ同じです。しかし、現行の学習指導要領の目標は次のとおりです。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、**簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る基礎**となる資質・能力を育成することを目指す。

これを読む限り、英語の授業で、数学や理科を学ぶ必要はありません。が、関連することはできます。「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーション」の解釈です。現時点では、要するに英語の授業は「コミュニケーション能力

の育成」です。数学や理科などの余分な学習はしないということです。ですが、内容を扱うこと自体は問題ないでしょう。教科等横断型授業は奨励されています。CLIL は特別なことをするわけではないので、日本では、この授業のような展開は何も問題ないわけです。

学習指導要領もまた改訂されます。聞くところによると、CLIL は推進されないようです。やはり、文部科学省は、依然として過去を引きずり、積み重ねて、少しずつ文言を変えて、言葉の遊びをしています。CEFR はようやく入りましたが、パフォーマンステストなどと評価だけに注目し、実質機能していないと言わざるを得ないと思います。ヨーロッパが CEFR といっしょに CLIL を推進した経緯を見逃しています。

CLIL-ite の活動で CLIL の普及に努めています。が、「興味はあるんですが、現状では授業で実践できません」と言われることが多々あります。やはり「忙しい」という一言に尽きます。中田先生は忙しい中でも、生徒のために意欲を喚起する授業を展開している姿に刺激を受けました。改善する点は多々あるかもしれませんが、授業は完璧である必要はありません。生徒も完璧である必要はありません。私も完璧ではありません。要するに日々コツコツと何が目の前の生徒に最適かを工夫することです。

One step at a time

笹島茂